

ヨハネス・ローマン

西洋人と言語の関係（言述における意識と無意識的形式）〔三〕

阿部ふく子・渡邊京一郎 訳

Johannes Lohmann

Das Verhältnis des Abendländischen Menschen zur Sprache
(Bewusstsein und unbewusste Form der Rede)

1952

Übersetzt von
Fukuko ABE
Kyoichiro WATANABE

Lexis: Studien zur Sprachphilosophie, Sprachgeschichte und Begriffsforschung,

Bd. III, 1,

unter Mitwirkung von

Walter Bröcker, Franz Dornseiff, Ernest Lewy,

herausgegeben von Johannes Lohmann,

Verlag von Moritz Schauenburg, Lahr i. B.

1952, S.22-33.

凡例

- 一、本稿は Johannes Lohmann, *Das Verhältnis des Abendländischen Menschen zur Sprache* (Bewusstsein und unbewusste Form der Rede), 1952 の翻訳 (一二一—三三三頁までの部分訳) である。続編は次号に掲載する予定である。
- 一、訳出にあたって底本としたのは次のものである。Johannes Lohmann, *Das Verhältnis des Abendländischen Menschen zur Sprache* (Bewusstsein und unbewusste Form der Rede), in: *Lexis: Studien zur Sprachphilosophie, Sprachgeschichte und Begriffsforschung*, Bd. III, 1, unter Mitwirkung von Walter Bröcker, Franz Dornseiff, Ernest Lewy, herausgegeben von Johannes Lohmann, Verlag von Moritz Schauenburg, Lahr i. B. 1952.
- 一、Michel Legrand-Jacques Schotte の訳版を適宜参照した。Johannes Lohmann, «Le rapport de l'homme occidental au langage (Conscience et forme inconsciente du discours)», traduit de l'allemand par Michel Legrand, Jacques Schotte, in: *Revue Philosophique de Louvain*, Quatrième série, tome 72, no. 16, 1974, pp. 721-786.
- 一、() は原著者による補足説明である。
- 一、「」および「」は訳者によるものであり、主に原語の併記、各種外国語で書かれた語句の訳の表記、その他の補足説明のために用いた。
- 一、【】内のアラビア数字は、底本の頁数を表す。
- 一、傍点は原文のゲシュ・ベルトに対応する。
- 一、太字は原著者による。
- 一、註番号について、原註を () とアラビア数字で、訳註を 「」と漢数字で表記した。

ῥητορικὴ という概念については、カール・ダイヒグレーバーによる研究論文「プロファシス——術語の研究」がある〔1〕。とはいえこうした研究によって、ダイヒグレーバーが公正な考察者に対し、「ῥητορικὴ」という語の元々の概念は主客の対立図式という視点から作られた「口実」を意味するものではない、という明確な結論を出しているわけではない。このことが示しているように、彼がたどり着けなかつた結論を出すために必須となるのは、単純にテクストを見て解釈することではまったくありえない。むしろまずもつて重要なのは、全面的に精神を切り替えよという問題である。この問題は、古代末期でもすでに思考の変化が生じていたことを考えれば、ますます難しいものとなる。いまとなつては、私たちが回顧したところで、当時の思考の変化は霧のように元々の意味を覆つてしまっているのである（したがつてもちろん、〔23〕ダイヒグレーバーが考察の出発点としている古代末期の「語源」も、私たちにとってはなんらの助けとはなりえない）。どんな翻訳も必然的に原典の歪曲をとまなう（たとえば「traduttore [翻訳者] - traditore [裏切り者]」のように）ということ、少なくとも理論上は一般に認められるところである〔2〕。だが、ここで具体的な状況に即して見てみると、別の思考形式のなかで考えられたものを扱うときには「論証」や「理屈をこねる」のが常だが、その時点ですでに精神はまったく気づかぬうちに誤つた軌道を進んでいるのであり、いわばテクストと、テクストを「理解」しようとする試みを隔てる壁を築いてしまっている。しかも、この壁が多ければ多いほど、そして高ければ高いほど、ますます明敏かつ「熟練した」かたちで論証がおこなわれると思ひ込んでいるのである。ここで明らかなのは——そしてこの場合以外にも当てはまるに違いないが——現代の精神科学において、理解にそなわる「装置」がますます複雑化することで、どれほど単純な「追体験」が麻痺し阻まれていくか、ということなのである。

イオニアの事実的思考が ῥητορικὴ [前触れ] だったわけだが——このことはダイヒグレーバーの研究によって

明らかになるにもかかわらず、彼自身はこの結論を引き出さなかった。というのも、彼は「口実／實際の原因」という近代のジレンマに囚われていたからである——この語の文字通りの対概念は、あるものが「突如として」、唐突に、「おのずから」出現する³³ことである（ἐξαίφνης ἀπὸ τοῦ αὐτομάτου [突如として、おのずから]、また先に挙げたトゥキユディデスの箇所 ἀλλ' ἐξαίφνης ὑπνεῖς ὄντας … ἐκάλειβε [健康だったその他の人々は突如として襲われた]も参照（第二巻四九章一節）。そして、πρόφασιςという「前現象」が体質や身体的な素因や気候などといった一般的な所与——これらの所与は出来事の自明な背景ではあるが、さしあたり必ずしも「現象」のなかには入り込まない——としばしば（つねにはなく！）結びつき、後に生じる特定の出来事の原因という性格を帯びるときに、両者（前触れとしての πρόφασις と、その対概念である「突如として」出現すること）は一致するのである（前掲書五頁以下を参照³³）。また、【34】頁の註の末尾で言及される事例も参照。その際「原因」という表現はあらためて考察すべきものとなる。というのも、いまは主立ってまったく念頭に置かれていない「因果性」がイメージとして持ち込まれるからである）。

πρόφασις [口実] は、πρό-φασις [前-現象] を πρόφασις [口実] たらしめるものとの一定の関係によって、πρό-φασις [前-現象] になるのである。しかも、この [πρό-φασις という] 語が告げているように、この関係はさしあたり [ante hoc [この-前に]] という関係であり、すなわちなにかが「あらかじめそこにある」ということなのである（「現象」じている³⁴ [Phänomenalität] とは、「そこにあること」[Dasein] にそもそもそなわっている第一の形式であるがゆえに、トゥキユディデスが第一巻三二章四節で述べている [ὄσα [思いなし]] に対立する。つまり και περιέστηκεν ἡ δοξασία ἡμῶν πρότερον σωφροσύνη … ὡν ἀβουλαία και ἀσθένεια φαινομένη [そしてかつては私たちの慎重さと思われていたものは、[……] いまや無思慮や無力にはかならぬことが明らかになった] [四]）。け

れどもそのとき、「振り返っている」人間精神がこの「前」現象」を捉えているのはもちろんのことだが、行動している人間精神までもがあらかじめすでにこの「前」現象」を捉えているのだとすると、「ante / post (前／後に)」はさまざまな観点で関係づけることができる。【24】こうしてこの観点から、「πρόφασις」という語の「意味」には多様な側面や一見すると矛盾に思えるものが出てくることになる。純粹に反省することによって、「πρόφασις」〔前触れ〕とその「post」〔後に生じるもの〕を「比べて」関係づけるということが生じる。だからこそ、トゥキユディデスの場合でも医師の場合でも、「πρόφασις」〔前触れ〕は (ο) μικρά「小さな」¹⁾ βραχεία「短いな」²⁾ μεγάλη「大きな」³⁾ μεγάλη「重大な」のような付加語と頻繁に結びつけて語られているのである。人々が相互に友好関係なり敵対関係にある場合のように、実践的な行為においては、「πρόφασις」〔前触れ〕の役割が「praecedens」つまり「先立つもの」という役割と似ているとするのは正しい。この場合「πρόφασις」という語の「具体的な意味は、こうした前現象や前面に出てくる現象、つまり「praecedens」〔先立つもの〕」⁴⁾ という言い回しから規定される。そうした意味は、しばしば免責 [Entschuldigung] や言い訳として用いられる⁵⁾。たとえばヘロドトスの報告によれば、テルモビュライの戦いのなかで生じた小さなエピソードがある (『歴史』第七卷二二九章以下参照)⁶⁾。ここでは、眼病で戦線を離脱した二人のスパルタ人のことが語られている。双方とも同じ事実によって「戦うことを」「免責」されていたのだが、一人は病気を押してまで前戦に飛び出し討ち死にし、もう一人は本国に帰還しそこで臆病者扱いされたのである (της μὲν αὐτῆς ἐχόμενου πρόφασις, οὐκ ἐδεδήσαντος δὲ ἀποθνήσκειν … σωθῆναι … διὰ πρόφασιν ταυτῆος [もう一人は、双方には同じであった事情を口実に用いて死を免れようとし、〔……〕このような「眼病という」口実を盾に生き残った])⁷⁾。もし彼ら双方が「本国に」帰還していたとしたら、眼病という πρόφασις は免責として認められただろうが (παρεὼν αὐτοῖσι ἀμφοτέροισι κοινῶ λόγῳ χρησιμαίνοισι ἢ ἀποσωθῆναι ὁμοῦ … ἢ ἀποθανεῖν [両名合

意の上で二人とも無事に帰ることもできたし、「……」討ち死にすることもできた」(七)、*πρόστας* という語は罪責 (*aitia*) という意味で用いられたのである。ある免責の根拠は、必ずしも不誠実で不名誉な「口実」、あるいは「言い逃れ」であるというわけではないにせよ、そうしたものにもなりうる。個々の事例を見てみると、こうしたこと〔両義性〕はしばしば個人の捉え方に左右される事柄である。だがここでの区別は、決して *πρόστας* という語そのもののなかにあったのではなく、全体の状況のなかに存していたのである。

「Vorwand〔口実〕」という私たちの概念を、ごく自然なかたちでヘレニズム以前のギリシア語に翻訳したものは、*πρόσχημα* という語であるように思える。けれども、この語がさしあたりは完全に直観的で感覚的に考えられているということが、なおも明白に認められる。この語は防御盾として、あるいはまたごりっばな建て前として「掲げ」られるもの」なのである(ヘロドトス『歴史』第四卷一六五章も参照。*ἡ φεσπετήν* [*Ἀπολύθεω*] *ἰκέτης ἴστρο, τιμωρήσασαι ἑαυτῇ κελεύουσα, προσηγομένη πρόσταςιν* [25] *ὡς διὰ τὸν μηδισμὸν ὁ πρῶτος οἱ τέθνηκε* 「ペレティメはエジプトに着くと、「アリユアンデスに」庇護を求め、息子はペルシアに加担したために殺されたのである」という口実を掲げ「*προσηγομένη πρόσταςιν*」援助を乞うた」(八)。トゥキュディデスもまた、同じイメージに基づいて *προβάλλω* 「前面に押し出す」という動詞を用いている。例えば、ケルキュラ人の言い分に対する答弁として、コリントス人がアテナイで語るシーンがそうである〔九〕。*καὶ τοῦτο τὸ εὐπερέως ἀστονοδὸν οὐχ ἵνα μὴ ἑυναυδικῶσι προβέβληνται, ἀλλ' ὅπως κατὰ μόνους ἀδικῶσι* 「また、条約を結んでいないという体の良い状態(同盟を組まない「中立」)を、彼らは『前面に押し出している』が、彼らがそう主張するのは、他国の不正には関与しないということではなく、(邪魔立てされずに)ただ自国のことだけ考えて不正を犯すことができるようにするためなのである」。さらに、エウスタテイオスは後に、*προβάλλω* 「前面に押し出す」という動詞に加えて *προσηγομα* 「掲げる」も用い、「口実」となっ

た πρόφασις に註釈を施している (2)。[「*κρυπτός*」] とも *κρυπτός* 「口実」が「仮面」、つまり πρόσχημα として使われることは、*πρόφασις* にとって表面的である。それはちようど、うわべだけの礼儀正しきつまり *εὐπρεπέας* 「体の良さ」が、よからぬものを隠すためのカモフラージュであり、表立って言われたことが喜んで差し出されたわけでは必ずしもないのと同じことである (両者はトゥキユデイスの『歴史』第六卷八章四節で結びつく。ο Νικίας ... *νομίζων τὴν πόλιν οὐκ ὀρθῶς βεβουλεύσθαι ἀλλὰ προφάσει βρυχαίῳ καὶ εὐπρεπέι τῆς Δικελίας ἀνδρός, μεγάλου ἔργου, ἐπιείθου* [(……) ニキアスは、アテナイ市が誤った判断をしており、全シケリア島にかかわるような「大事」に対して、*κρυπτοῦ* 体の良い口実で軽々しく着手しようとしていると考えた] (3)。*κρυπτός* [「*κρυπτός*」] と *εὐπρεπέας* 「体の良い」という二つの付加語は、*πρόφασις* 「口実」が置かれている二つの関係を具体的に表している。μέγα ἔργον 「「大事」と比べるべき πρόφασις 「口実」は (あまりにも) 「*κρυπτός*」ものとなる——と二つの *πρόφασις* 「口実」はこの「大事」に「*precedens* (先立つもの)」として機能しているのだから。他方で当人との関係に立つと、*πρόφασις* 「口実」は体の良い見かけを、つまり「*εὐπρεπέας* 「体の良さ」」を与えるよう求められている。純粹に「現象的」なのは、デモクリトスの箴言における *πρόφασις* という語である。デイールス／クラントツ (以下) 『ソクラテス以前哲学者断片集』第六八章 B 222 では次の通り。τὰ τέκνοις ἄγαν χρημιάτων συναισθητὴ πρόφασις ἐστὶν φιλανθρωπικῆς φήσον ἴδιον ἐλέγχουσα 「子どものために過度に金銭を蓄えるというのは、金銭好きへの口実で、それは当の事柄に固有の特性をよく表したものである」(4)。この箴言の意味は、デイールスによるドイツ語訳だと完全に歪曲されてしまっている (「子どものために過度に貯蓄することは、そのことで自分固有の本質を表している貪欲な人の口実なのである」——これではあたかも、*ἐλέγχουσα* 「表したものの「主格」」ではなく *ἐλεγχούσης* 「表したものの「属格」」のようではないか)。*κρυπτός* の「*πρόφασις*」の意味は「医学的な」意味とまったく類比的である。

つまり、子どもの将来のための過度な心遣いのうちには、*φιλαυτην*〔貪欲さ〕がさしあたり現れているが、この「先立つ現れ」は同時に、ここではまだ隠されている特有の性格をさらけ出して出している、ということなのだ。

ここで詳しく述べた意味における *προφασίς* は、古代ギリシアの思考全体を見渡してみると、ソクラテスによって開始された偉大なアッティカ哲学の前に位置するがゆえにその影響を被らない、そうした時代に特徴的な概念として現れる。偉大で創造的な思索者たちを擁するこの時代を牽引したのは、意識的であろうとなかろうと、【26】デモクリトスが好んで引用したアナクサゴラスの箴言であった。曰く、*ὄντις ὁπίσθον τὰ πάντων ἐν*〔明らかならざるものを見るのが現象である〕【二二】(ディールス／クランツの『ソクラテス以前哲学者断片集』第五九章)アナクサゴラス *Β21a*。これについては、ディラーによる同名の論文も参照のこと【二三】。こうした概念史的な事実のうち、関心の変化やそれによって条件づけられた思考の方向の変化が現れている。ソクラテスは、*πρόθεστος*〔汝自身を知れ〕というデルフォイの箴言を実現するなかで、外的な現象から離れて、人間の靈魂やその内的な生にまなざしを向け返した。その後、プラトンのアカデメイアでは数学が、すなわち「アプリオリな」(プラトンによれば超越的な「想起」(*ἀνάμνησις*)から生じるとされる)直観の学問が、学的認識の理想となった。こうしたことによつて、イオニアの事実的思考という *προφασίς*〔前触れ〕は淘汰されるほかなかった。その結果、この語はいまや、プラトンやアリストテレス、テオプラストスではほとんど登場することがない。ダイヒグラーバーはこのことについて、プラトンがおそらく意識的にデモクリトスを無視したという事実を引き合いに出しつつ、きわめて説得的に論じている【二四】。

トウキユディデスと医者者の *προφασίς*〔前触れ〕は、現象的な／現象外の (*ὄντις*〔見るごと〕／*ὁπίσθον*〔明らかならざるもの〕)の「思考に適合する。そう言えるのは、実際」の「前・現象」が様々な状況下で一般的な面を顧慮しな

いままでもよく、まさにそれゆえにこそ「現れ」ないという観点からすれば、両者の πρόφασις〔前触れ〕はある固有の「弁証法」のうちにあるからである（ここで言う前現象とは ἀληθεύειν πρόφασις〔明らかな前触れ〕、つまり医学における一般的な所与である。本論文【23】頁を参照）。こうした思考に従うならば、デモクリトスにおいても（ディールス／クランツの『ソクラテス以前哲学者断片集』第六八章）デモクリトス B 二で述べられている νόημα、すなわち「認識」と同様に） πρόφασις は二つの形式 (ὄνομα) を有している、と言うことができるだろう。つまり ἡ μὲν γνῶσις, ἡ δὲ σκοπὴ〔一方は真の認識で、もう一方は曖昧な認識である〕【二五】。とはいえず、(トウ キュディデスの言う)「真の」 πρόφασις〔前触れ〕は、直接この二つの形式によって ἐς τὸ γενερόν λεγεται〔はつきりと言及されている〕わけではない。

さて、こうした「イオニアの」(「年代的」な意味ではなく、むしろ「ソクラテス以前」という内容的な意味における) πρόφασις〔前触れ〕は、この語の根源的な概念を表現するのだろうか。この問いに応答するためには、なによりもまず、 πρόφασις という語がホメロスの時点でも立て続けて二回登場し、二回ともすでに πρόφασις という型にはまった対格のかたちで用いられていることを考慮しなければならない。一回目は、プリセイスの返還に際してアガメムノンが〔ゼウスに〕誓いを立てるシーンである(『イリアス』第一九歌二六二行)【二六】。ここでの πρόφασις が、実際に考えられた、行為へと駆り立てる理由を意味しているのはまったく明らかである。アガメムノンは誓う、私は肉体関係を持ちたいがため (ἐπιβῆς πρόφασις)〔一緒に寝るといふ理由〕とか、その他の理由に駆られて、プリセイスに指一本触れたことはなく、と。二回目の πρόφασις では(第一九歌三〇二行)【二七】、「前面に出された」理由のことがさしあたり考えられそうなものだが、実際には違っていた。女たちはパトロクロスに対するプリセイスの嘆きにつられて泣いた。が、それは Πατρόκρον πρόφασις, σφῶν δ' αὐτῶν κηδεῖ ἐκάστη〔パトロクロスをうわべの

理由としていっているのであって、本当は自分自身を嘆いたのである。パトロクロスに対する嘆きは「当面問題になっている」ものであるとともに、彼女たちは彼女たちで、それぞれ (skōnē) が「自分にとって」の苦しみを嘆くことを許される。もつとも、この嘆きは、彼女たちが「泣女」として自らの責務をいっそうふさわしい仕方ですたすことを、阻むどころか逆に和らげてくれるものでもある。こうして、パトロクロスに対する嘆きとそれに繋がる「自分自身の嘆き」とのあいだには、目に見える外面上の制約と、「自発性」との対立も見て取れるのである(本論文【23】頁を参照)。

それゆえ、ここでの *prophētis* [「うわべの理由」] も、イオニアの医学やトゥキュデイスの場合と同様に、口実／實際の原因という後の対立とはあまり関係がないばかりか、むしろまったく関連を持ちえないのである。とはいえ、少なくとも第一のアガメムノンの誓いの場合に限って言えば、*prophētis* [理由] は単に「現象的な」ものでもない。これに関してダイヒグレーバーは、『イリアス』第一九歌(二六二行) *(ou' euvnē prophētōu kephēlēnos oure teu ōllou)* [「一緒に寝るといふ理由に駆られたのでも、ほかのいかなる理由でもなく」(二八)の「決疑法」に「法の領域」を見て取っているが(前掲書二頁註一を参照(二九)、これは私たちにとっていくらか奇異な印象を与えるかもしれない。けれども、私としては、語源的な関係もまた、結局のところ同じ方向性を示すと思われる(30)。この語はすでにホメロスにおいて、そのように固定化した型どおりの言い方で見出せるわけだが、この語の成立時期に目を向けてみると、私たちが語源的に同型の概念として仮定することができるのは、たかだか神性の「代弁者」を意味する *prophētis* という語だけである(一方で、ホメロスにおいては *strophētis* [代弁者] という語しか出てこない。だが、これはおそらく韻律上の成り行きだったのだろう)。こうして、*prophētis* のごく自然な基本的な意味とは、たとえれば「declaratio [表明する]」、*proclamatio* [宣言する] (あるいは、語源的にもびったり対応する「*professio*

〔告白する〕〕であることが分かる。そうだとすれば、*Ἰπρόφασις τινος*〔誰の口実か〕^{〔110〕}は、さしあたり「の」説明ないしは理由づけによって「を意味することになるだろう（*Ἰπρόφασις τινος* は支配する動詞に「内的〔目的語の〕対格」として関係する^{〔111〕}。例えば、『イリアス』第一五歌七四四行では次の通り^{〔111〕}。ὄς τις δέ Τρώων κοιλίῃ ἐνὶ νηυσὶ φέροντο σὺν ἄντρῳ κηλέϊο, χάρην Ἐκτορος ὀφειλύναντος;…〔ヘクトルの激励に應えて、トロイア勢のなかから燃える火を手にして船に迫る者があれば…〕「ヘクトルの激励の恩恵を」。さらに副次的なことだが、この語〔*Ἰπρόφασις*〕は、前置詞 *πρὸ*〔前に〕と動詞由来の名詞 *φάσις*〔告げ報せること〕の二つの意味を常に可能にしておきたいがために、語りや *διδαχῶνος*〔対話〕の領域から、事実上「*precedens*〔先立つもの〕」という理論的・診断的な領域に引き下げられるだろう。

【28】^{〔112〕}で詳述されたことが適切だとすると、私たちはなおも、*Ἰπρόφασις* という語をめぐる二重化に、つまり二重の「概念の隠し絵」にかかずらっていることになるだろう。だが、このとき三つの「層」は、厳密な意味で互いに区別されているわけではない。とりわけトゥキユディデスの場合、客観的に動因となっている「前・現象」を通して、「表明に関わる」要素がまだ多様な仕方ではのかに瞬いているのである^{〔4〕}。だがいずれにせよ、この要素そのものもまた、「口実」という概念とはなんの関わりもないのだから、この点で、あらゆる語源的な試みはまったくもって恣意的な所業になる。この試みは、いかなる仕方をもってしても事実に基づいて根拠づけることができない（ヴィラモーヴィッツ『エウリピデスの『ヘラクレース』第二卷四三頁を参照^{〔113〕}。ヴィラモーヴィッツによれば *Ἰπρόφασις* = *φάσις ἀντι τινος*〔誰かの代わりの告発〕である。またダイヒグラーバー前掲書二頁も参照のこと^{〔114〕}。ダイヒグラーバーによれば *φάσις πρὸ τινος* = *φάσις ὑπὲρ τινος*〔誰かを守るための告発〕である）。

しかしました、似たような二重化が、ソクラテス的な「本質への問い」と、とりわけヘレニズム以降に変化した「原

因を求める」思考とによって生じており、私たちとしては、この二重化によってトゥキュデデスを完全に把握し
されるかのように見える。トゥキュデデスは「原因」と「結果」から成る因果性という私たちには自明に思える
図式の内を考えているわけではない、ということはないを意味するのか。このことが歴史学者や文献学者たちにす
でに意識されていたのか、とりわけトゥキュデデスの影響が及ぶ範囲全体において意識されていたのかは分か
らない。彼にとって *aitia* 「原因」とは「責任を負わせること」であり、私たちの言葉で言えば「主観的な」もの
あるわけだが、さしあたりは心理的事実と解せるだろう。だが、この心理的事実に対してトゥキュデデスは批判
的態度を取る。すなわち彼は、症状つまり認識可能な *teknipla* 「しるし」からその背後にある [*anthes* 「真なるもの」]
を推論するという、批判的観察者の診断を持ち出すのである。こうしたことを、『歴史』第一卷二三章四節および
第二卷四八章と四九章は、それぞれのテーマこそまったく異なるにせよ、同じ仕方で指し示している。トゥキュデ
デスが出来事を「判断して」報告する者でないことは、『歴史』第一卷二二章一節の文章にも示されている。 *ἐκ
τῶν εἰρημνέων τεκμηρίων … τοῦτ' ἂν τις νομίζῃν … ἂν ἀληθὲν οὐκ ἀπαράνομα*。あるイギリス人（ブルームフィールド）
はこの文の意味を、（もし彼「批判的観察者」が私「トゥキュデデス」の結論を受け入れるならば）「彼は自らの
判断において誤ることはないだろう」と理解している^{〔三五〕}。そのとき、このイギリス人の身には、ルターによる「ヘ
ブライ人への手紙」（一一・一）の翻訳と同様のことが降りかかる（本論文【7】頁参照）——つまり、翻訳によっ
て、いつの間にか思考の形式がまったく異なるものへと転じてしまうのである。こうして「欠陥（Fehler）」は「誤
謬（Irrtum）」へと変化したのだった（これについては『レクシス』第二卷二二二頁、二二四頁を参照）。【29】ま
た、 *νομίζαν* 「慣習であること」というまったく客観的な表象から、「判断すること」や「信じること」という主観
的な表象への移行は、ともすれば、先の変化に比べるといっそう重大事であるのかもしれない（*νομίζαν* はもちろん、

とりあえずは「慣習」を、つまり覚え込んだ習慣を表している。それゆえ、ヘロドトスの『歴史』第一卷一四二章および第四卷一八三章でも、言葉を「持つこと」ないし「獲得すること」が γλώσσαν νομιῆεν [「言葉を慣習として用いること」と言われている。すなわち、γλώσσαν οὐ τὴν αὐτῆν νομιῆσκον [「彼らは同じ言葉を用いず」、または γλώσσαν οὐδεμιῆ ἄλλῃ προποιοῖν νομιῆσκον [「彼らは他のいかなる言葉にも似ていない言葉を用い」]。ヘレニズムの宗教は νόμος [「慣習」、つまり θεοῦ νόμιεν [「神を祀ること」]だったのであって、キリスト教になってようやく、宗教は「信仰」に、すなわち *credere in deum* [「神への信仰」となるのである)。

要するに、およそ古典期のギリシア人を理解しようという気があるならば、私たちはさしあたり、「判断」から *gnōsis* [「判断、批判」へと遡らなければならない」というのも、私たちは知らず知らずのうちに、すべてを「判断」形式で考えているからである)——ギリシア人の場合、「学問的」思考は「判断する」という「態度ではなく「批判的」態度として成立し、その後、これがヘレニズムにおいて「判断形式」に移行するわけだが、結局のところ、この移行もさしあたっては「批判的」精神へと回帰するものであった。こうして見るならば——また「ルネサンス」という表象がもつ正確な意味にも鑑みて——いまや「近代精神」は本質的に、ギリシア哲学において初めて芽生えた「批判的」精神と、やがて支配的となつていった主観的な判断形式とを結びつけるものとして理解できるだろう。

哲学的批判はヘレニズムにおいて生産性なき否定となる。それは「懐疑論」として、判断保留 (*diplousis* [「独断」の *epistēmē* (停止) を要求することで、デカルト流の肯定的な端緒にいたる可能性を初めからことごとく遮断した。この点で、哲学的批判は、形式的には「判断する」という「態度の変種でありつづける。すなわち、ストア派やエピクロス派、その他伝統的な学派といった「独断論の」一派とは別の、「一派」になつていたのである。哲学的批判は、そうした独断論一派の内でも、とりわけストア派を正当にも自らの本来の対極と見なす。ストア派の哲学は、根源

的には一であったはずの「客観性」「主観性」「間主観性」(οβστία「存在」 νόβς「思考」 λόγος「言葉」)を要素分解したのだった(これについては『レクシス』第二卷二一五頁を参照)。だが、ストア派の論理学は λείον「言表されたもの」ないし *dicibile*「語られうるもの」を、それゆえ間主観的な現象を志向しつづけていた。その後、古典後期以降に論理的な思考を支配し始めた新アリストテレス主義は、エピクロス派や懐疑論にあつて言語から引き剥がされた純粹に主観主義的な思考の兆しをあらためて完全に覆い隠したのであった。だからといって、これらの思考の方向性が完全に解消されたわけではない(例えば、デカルトがソクラテスを *de omnibus dubitare*「一切について疑うこと」の発見者としたことは、特筆すべきである^{〔二六〕}。これについては『レクシス』第二卷二四九頁を参照。それはもちろん、懐疑論の傾向を帯びた【30】アカデメイア派の側から理解されたソクラテス像であるうえに、ラテン語の資料によって伝えられたものなのである)。

ヘレニズム初期にテオプラストスが『人さまざま』を書いたのは、故なきことではない——ヘレニズム哲学の「疑い」もまた、「生の形式」、つまり態度の形式だったのである。すなわち、「ひよっとするところではないかと注意深く観察すること」(οκείνω)であつて、一度下した判断を軽率に固定化することを控えること(δογμα「独断」)に関わる ενοχή「停止」)でもある。言い換えれば——「中期アカデメイア派」において——「疑い」とは *disputare in utraque parte*「両者の立場に立つて議論すること」であつて、それゆえ語りにおいて「懐疑」を能動的に行使することなのである。近代の徹底的な主観主義は、言語音において具体化される思考形式そのものを無化し、「主観」それ自体によつてこの形式にそなわる間主観的な影響力を篡奪することで幕を開けた。他方で、ギリシア元来の思考形式において、λόγος「言葉」は客観的な規範として、客観的な真理たる事柄(なんであるか)と一致していた。近代のこの徹底的な主観主義とギリシア元来の思考形式とのあいだに実存形式が存しており、その内で言語形式は

人間的な態度の様式となるのである。この様式が「作法〔Umgangsform〕」であり——人間同士が上手に付き合う方法なのである。

このことは実際「修辞学」において起こるのだが、もちろん、「修辞学」とはそもそも実践的な形態をとまうものである。この実践的な形態のうちで、言語はさしあたって影響力をもつにいたったのだが、その範囲は古典古代の文化全体を初めとし、それからさらに古代ギリシア・ローマから影響を受けた文化圏に広がって、「形式的教養形成」として近代の中枢深くまで及んでいったのである。

しかし程なくして、言語は「作法」という態度様式として、西洋の〔abendländisch〕歴史を生きる人間にとっても意識されるようになった。ストア派の論理学は、言語をそのつと特定の態度形式として特徴づける。ディオゲネス・ラエルティオスの『ギリシア哲学者列伝』第七卷六六節以下によれば、ストア派の論理学は「ἄκτῆ〔言表〕」という基本語をこう定義している〔17〕。ἀκτῆμα … ἐστὶν ὁ λέγωντες ἀποφανόμεθα 「判断」……とは、私たちがなにかを発言するときその言表にともなうものである」—— ποστικόν δὲ ἐστὶν πρῶμα ὁ λέγωντες ποστικόςμεν 「命令形」とは、ある事柄について発言するときに、私たちが『命令している』というその事態である」——（その後欠落箇所が続く）〈προσαγορευτὸν〉 δὲ ἐστὶν πρῶμα ὁ, εἰ λέγοι τις, προσγορευθεὶς ἄν「呼びかけ」〔内的形式〕としての呼格）とは、ある人が誰かのことを口に出して呼びたいときに、その人が『呼びかけている』というその事態である」。

これらの定義は論理的な洗練さをそなえている。そのため、カール・プラントルが『西洋論理学史』のなかで〔31〕何頁にもわたってストア派の論理学を乱雑に罵っていることを思い起こしたとき、それについては本当のところわずかに——作り笑いを浮かべることしかできない。実際、ここではもちろん、「内的言語形式」というフンボルトの思考が、もっとも無知な者でも理解できなければならないというくらい自明なものとして実践的に用いら

れている。しかし、この思考については、今日までごく少数の哲学者と言語学者しかその意義を把握してこなかった。おそらくこの事態以上に、私たちが手にしているのとは別の言語との関係があるに違いない、ということをはっきりと示しているものはありえない。思考は、ここではまだその言語的な形式化（思考は中世の唯名論以降、決定的な仕方での形式化から引き剥がされる）と軌を一にしており、したがって言語とは人間の思考する態度なのであつて、ストア派の言語理論はこの態度をその形式において把握しようと努めたのである。

私たちはここで再び『レクシス』第二巻二二六頁で引き合いに出された事例のように、ラテン語の日常表現のなかにストア派論理学の着想を見出すことができる。それが *argumentum* [論証] であり、キケロは『トピカ』のなかで *argumentum* に基づいて「トピカ」と「弁証論」を構築したのだった。*argumentum* は「語用論的に」理解されたストア派の *λεκτόν* [言表されたもの] 以上のなものでもない。ストア派論理学の言語においてそれは *πράξις ὁ ἀγώνων τελέσις* [私たちが言明しながら確信することを試みる] 事象内容」と定義されうるであろう。さらに言うと、*argumentum* という論理的な着想は、今日では言語の音声的側面を扱う「音韻論」という学問において、(觀念上の)「音素」とその事実上の「発音」とを対照する点で、「項」として「實用化されている。もっとも意味論の側面では、こうした原理は試みられているにせよ達成には程遠く、まったく保守的な小心者たちの執拗な抵抗に遭っている。

私たちの見解が正しければ、思考がまだその言語による形式化から引き剥がされていなかった頃は、「判断」という思考形式もまた(言語形式のうちで遂行される)態度様式、つまり語る者が存在するものに対して取る態度だったに違いない。形式的に見ると、この態度には四つの可能性がそなわっており、それらはラテン語で以下のように定式化できる。1. 私は存在するものを肯定する [*affirmo id quod est*]、2. 私は存在しないものを否定する [*nego*

id quod non est」、3. 私は存在しないものを肯定する [*affirmo id quod non est*]、4. 私は存在するものを否定する [*nego id quod est*]。いつものことだが、この手の区別は「事柄のつじつまが合わない」場合にまずもって際立つてくる。とすれば、「口実」(*praetextum*)はこの図式の3の事例に属することとなる。「口実」とはある態度の建前となる動機であり、このこと自体が「偽善を行なう」という本音を隠すための態度様式に対応する。ギリシア語の場合、この「偽善を行なう」という概念には、【32】とりわけキリスト教以来この語が帯びる「主観的」な調子や(心理学的な)色合いはさしあたり含まれていない(もちろん、*hokkinechou*「ある役割を演じる」は、元々はまったく中立的な語である)。これに対してラテン語の場合は逆に、この概念が一組の動詞において二重の意味を成している——原理的にありうる二つの不一致に対して、一つずつ動詞が当てられるのである(上記の3と4の事例)。つまり、*dissimulo*「私は(なにか在るものを)隠蔽する」というのが4の事例で、*simulo*「私は(在りもしないものが在る)ふりをする」というのが3の事例である。このように、ラテン語で偽るといふ態度が表現されるとき、私たちは真理を「相関関係」、つまり私と事柄との関係と見なしている。この関係は、ずっと後の時代によくやく哲学の理論として定式化されたもので、はじめから概念形成の基礎を成すことになっている。

ギリシア語において、真理は現在のうちに、つまり存在それ自体の現前(アリストテレスはこれを *energeia*「現実態」と呼ぶ)のうちに存していた。この真理は、存在するものとの関係(ここでは「判断」や「態度」という関係一般)としての真理とはまったく異なる資格を有している。存在それ自体の現在とは、絶えず二つの側面ないし次元へと向かう「頹落」に晒されている。ここでは、「客観性」と「主観性」という二つの側面が独特の様式で屈折させられて、この「ギリシアの」まったく異なる認識形式に反映されているのである。一方では、「存在する」ものは「生成」の不安定さに晒されている(生成とは *γενεσθαι*「生じること」であり、それは純然たる「事実的な」

存在であつて——「存在する」存在つまり *ēvvero* 「生じた」を意味するのではない。他方で、「存在する」ものはまた「仮象」という錯覚に晒されている（仮象とはデモクリトスの *okotin·vōiun* 「闇の認識」であり、パルメニデスやプラトンなどによれば「*ōgōn*（思ひなし）」である）。実際、ギリシア語において存在を低下させるこの二つの様式は、そのような低い地位にあつたとはいへ、「存在の形式」として存在から考えられている。このことを示しているのが、*tyxāveiv* 「偶然存在する」と *naivāveiv* 「人知れず存在する」という存在を表わす二つの動詞である。おそらく、これらの動詞は長い説明を要するまでもなく、ギリシアの根源的「思考形式」の特殊な精神性をうまく特徴づけている。真理の形式には、「仮象」の正体を暴き「存在する」ものを白日の下にもたらし *ēsthyōs* 「反駁」が属しているのである。ストア派の論理学と認識論においては、*tyxāvon* すなわち（作用しつつ被るものとしての）「時間のなかにある存在者」が本来の存在者となつて（ちなみに *tyxāvon* は、ヘレニズムで言うところの *Tyxūn* 「運の女神テュケー」が果たしている役割にも現れている。『レクシス』第二卷七一頁以下）、その一方でプラトニックな *ōvteōs·ōv* 「存在それ自体」は *ēōv* 「非存在」になる（『レクシス』第二卷二一六頁）。こうしたとき、真理は以後、古代本来の意味での *ēsthyōs* 「反駁」にはもはやまったく手の届かないものとなるだろう。もちろん実際のところ、アリストテレス以後の哲学者たちは、【33】古代の意味での真理の探究者というよりは、「魂に配慮する者」ないし「懐疑論者」であつた。彼らはまた、*atapaōtia* 「平静な」という「倫理的な」状態を自らの目標として高らかに宣言したのだった。

アリストテレス以後、ギリシア的思考がもつ精神的な力は頹落に陥つたわけだが、要するに、近代の考察者たちいつでも絶えずこのような頹落として生じているものの正体とは、実のところ真理形式の変化から帰結する関心の逆転だったのである。*logos* 「言葉」が直接的に真理を開示するのを止めてしまったことで、「語用論的」で実践

的な立場への拘束が生じた。この立場にあつて問われたのは、(現実に)存在するものではもはやない。むしろ、私の行為がもたらす「作用」、つまり引き起こすものと引き起こされるものの「*causa efficiens* [作用因]」が、後付け的に整合されることで問われたのである。こうして、いかにしてそれは現実に在る(在った)のかという古代ギリシアの問いは、いかにしてそれが生じたのかという問いへ変化することを余儀なくされたのだった。

(つづく)

原註

(1) すでに *ἀγων πρόφασιν οὐ δέχεται* 「競技に言い逃れは許されない」という古い格言のなかでその用例がある。ピンダロス(『ピュティア第五歌』二八行)はこの格言に誘われて、「気づくのが(あまりに)遅いエピメテウス、その娘プロファシス(Ἐπιμαθεὺς ὀφινύου θυγατέρα Πρόφασιν)」という巧みな神話の構図を描き出した(つまり、プロ…とエピ…の言葉遊びである。もともと、一見すると、プロファシスはプローメテウスの方に属しているように見えるのだが!)〔ピンダロス『祝勝歌集／断片選』内田次信訳、西洋古典叢書、二〇〇一年、一七三頁参照〕。

(2) ④459を参照。ὡς γὰρ ὁ μαχόμενος προτίσεται εἴρων προβάλλεται πᾶσι τὴν ἑαυτοῦ ὄρλον πρόβλημα, οὐτὸ προτίσεται λόγων τινὰ ὡς ὅταν βοηθητικὸν πρόβλημα ὁ προσασσόμενος; 「したがって、争っている人がなにかその人自身の盾[*πρόβλημα*]となるようなものを掲げ、前面に立てるように、その人はまたなんらかの理屈を掲げる。こ

れはまた、弁明している人が「自らを弁護するのに」役立つ口実「*προβάρητα*」を掲げると同様である。
vgl. *Eustathii Commentarii ad Homeri Iliadem*, vol. 2, edited by J.G. Stallbaum, Cambridge, Cambridge University Press, 2010, S. 223.)

(3) このことについてはヘルマン・グンタートから示唆を得た。この段落を書くにあたって、彼の指摘は意義深いものであった。記して感謝したい。ただし、ここで呈示された見解に対するなんらかの責任は彼の負うところではない。

(4) それゆえ、この「表明に関わる」要素は、【24】頁の註で言及した「*ἀγὼν πρόφασιν ὃν δεύεται*」〔競技に言い逃れは許されない〕という古代の格言に対しても意味の背景を付与しよう。また、先に述べたヘロドトスの引用箇所（『歴史』第七卷「二一九章」）でも、*πρόφασιν* は同時に可能的な *λόγος* でもあるのだった（*τραπεὸν αὐτοῖσι κοινῶ λόγῳ χρησιμαίνονσι*…【24】頁を参照）。

訳註

- 〔一〕 Karl Deichgräber, „ΠΡΟΦΑΣΙΣ: Eine terminologische Studie“, In: *Quellen und Studien zur Geschichte der Naturwissenschaften und der Medizin*, Bd. 3, Heft 4, Max Wellmann zum 70. Geburtstag, 15. März 1933, S. 1ff.
- 〔二〕 ルネサンス期の詩人であり詩論家ジョアシャン・デュ・ベレーの論文『フランス語の擁護と顕揚』（一五四九

- 年)のなかに次のような記述がある。「それでも翻訳者と呼ばれるより、裏切り者と呼ばれるにまことにふさわしい連中についてなにをいうべきでしょうか。なにしろ彼らはみずから翻訳しようと企てた作家を裏切ることになるのですから〔……〕さらに自分の価値を高めようとして、詩人に矛先を向けるのです。しかし詩人というものは、たとえ私にとって翻訳が可能であり、翻訳したいと望んでも、彼らが他の人々より余計にもっているあの神のごとき創見や、偉大な文体や、壮麗な言葉つき、重々しい思索、大胆で変化にとんだ表現形態、そのうえ、なんといったらよいのか、彼らの著作のなかに潜んでおり、あの古代ローマ人が神霊と呼び習わしている要するに霊魂のようなあの力強さのために、私が今後自分のものにしてようと習練することが余りなさそうな種類の作家たちなのであります」(Joachim du Bellay, *Défense et illustration de la langue française*, Avec une Notice biographique et un Commentaire historique et critique, Par LÉON SÉCHÉ, Bibliothèque Internationale D'édition, E. Sansot & Cie, 7, Rue de l'Éperon 7, Paris, 1904, p. 76f. 「加藤美雄訳「フランス語の擁護と顕揚」、『世界の詩論』窪田般彌・新倉俊一編、青土社、一九九四年、四五頁)。
- 〔三〕 Deichgräber, a. a. O. S. 5f.
- 〔四〕 Thukyrides, *Geschichte des peloponnesischen Kriegs*, Griechisch und deutsch mit kritischen und erklärenden Anmerkungen. Erstes Buch, Verlag von Wilhelm Engelmann, Leipzig 1852, S. 56-57. (トゥキディデス『歴史 1』藤縄謙三訳、西洋古典叢書、京都大学学術出版会、二〇〇〇年、三四頁参照。) スパルタの将兵エウリュトスとアリストデモスの二人は、戦地にて重い眼病を患ったため、陣地から離脱し病床に就いていた。その後、両名合意の上でスパルタへ帰国するか、帰国を望まなければ前線で討

- 死するかという選択を迫られたが、両者は協調を好まず、それぞれ別の道を選んだ。エウリュトスの方は再び出陣し、ペルシア軍との戦いの最中に討死した。他方、アリストデモスは独り祖国へ帰った。スパルタ国民はこれを見て憤り、アリストデモスが眼病という二人の将兵にとっては同じ事情を口実にして死を免れようとしたと指弾し、「腰抜けアリストデモス」と汚名を与えた。
- 〔六〕 ヘロドトス『歴史（下）』松平千秋訳、岩波文庫、二〇〇七年、一六八頁参照。
- 〔七〕 同書一六七頁参照。
- 〔八〕 ヘロドトス『歴史（中）』松平千秋訳、岩波文庫、二〇〇七年、一一一頁参照。
- 〔九〕 Thukydidēs, a. a. O., S. 56-57. (トゥキユティデス前掲書三四頁参照。)
- 〔一〇〕 Thukydidēs, *Geschichte des peloponnesischen Kriegs*. Griechisch und deutsch mit kritischen und erklärenden Anmerkungen, Sechstes Buch, Verlag von Wilhelm Engelmann, Leipzig 1853, S. 20-21 (トゥキユティデス『歴史 2』藤縄謙三訳、西洋古典叢書、京都大学学術出版会、二〇〇三年、一〇一―一〇二頁参照。)
- 〔一一〕 内山勝利編『ソクラテス以前哲学者断片集〈第IV分冊〉』岩波書店、一九九八年、二一七頁参照。
- 〔一二〕 内山勝利編『ソクラテス以前哲学者断片集〈第III分冊〉』岩波書店、一九九七年、二九二頁参照。
- 〔一三〕 Hans Dieller, „ὄψις ἀορίκων τὰ πανόμωρα“, *Hermes* 67, 1932, S. 1442.
- 〔一四〕 Deichgräber, a. a. O. S. 10.
- 〔一五〕 Hermann Diels, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Bd. 1, 9. Aufl. hrsg. von Walther Kranz, Weidmannsche, Berlin 1960, S. 140.

〔二六〕 ホメロス『イリアス（下）』松平千秋訳、岩波文庫、一九九二年、一三九頁参照。

〔二七〕 同書二四一頁参照。

〔一八〕 同書一三九頁参照。

〔一九〕 Deichgräber, a. a. O. S. 2, Ann. 1.

〔二〇〕 *Ἰρρασιβή* は *Ἰρρασιβή* の女性単数対格で、*τινός* は疑問代名詞 *τις* の属格であるため、厳密に訳せば「誰の口実を」となる。

〔二一〕 「内的目的語」とは、たとえば *ἦτοδ ἔσθιεν* と *ἔσθιεν* ‘Kampf und kämpfen’ のように、「形態や意味の上で、支配している動詞と類縁関係のある目的語のことをいう」（『ドイツ言語学辞典』川島敦夫ほか編、紀伊国屋書店、一九九四年、四〇三頁参照）。

〔二二〕 ホメロス前掲書一一二頁参照。

〔二三〕 Ulrich von Wilamowitz, *Euripides Herakles*, Bd. 2, 2. Aufl., Weidmann, Berlin 1895, S. 43.

〔二四〕 Deichgräber, a. a. O. S. 2, Ann. 2.

〔二五〕 Thukydidēs, *The History of Peloponnesian War*, vol. 1, by the rev. S. T. Bloomfield, London, Longman, 1842, p. 38.

〔二六〕 たとえば、デカルト『精神指導の規則』の次の箇所を参照。「ソクラテスが、自分はすべてを疑っている、という場合にもまた、そこからは次のことが必然的に帰結するのである、ゆえに彼は少なくとも自分が疑っていることを知っている、同様に、ゆえに彼はあることが真あるいは偽でありうることを認識している、等々、なぜなら、これらの帰結は懷疑の本性に必然的に結合しているからである」（『精神指導の

規則』大出晁・有働勤吉訳、『デカルト著作集4』白水社、一九七三年、七一頁。

- 〔一七〕 Diogenis Laertii *Vitae Philosophorum*, vol. 1, ed. Miroslav Marcovich, Walter de Gruyter, Berlin 2008, S. 484.

阿部 ふく子（あべ・ふくこ）／新潟大学人文学部准教授

渡邊 京一郎（わたなべ・きょういちろう）

／東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程